

「 釧路湿原自然再生協議会 」

第 3 回 水 循 環 小 委 員 会

資 料

平成 1 7 年 1 月 2 6 日

釧路湿原自然再生協議会運営事務局

釧路湿原自然再生協議会

- 第3回「水循環小委員会」 -

日時：平成17年1月26日（水） 14：00～16：00

場所：釧路地方合同庁舎 6階 釧路開発建設部入札執行室

議事次第

1. 開 会

2. 議 事

1) 委員長の選出

2) これまでの調査・検討経緯と今後の計画

3) 平成16年度の調査・検討成果の報告

4) 水循環小委員会の今後の進め方について

5) 流域の水・物質循環系について

テーマ：釧路湿原の水循環について

発表者：(独)北海道開発土木研究所 環境研究室長 中津川 誠

3. その他

4. 閉 会

釧路湿原自然再生協議会
水循環小委員会 委員名簿

計:47名

個人(23名)

(敬称略、五十音順)

No	氏名	所属
1	井上 京	北海道大学大学院 農学研究科 助教授
2	梅田 安治	農村空間研究所 所長、北海道大学名誉教授
3	大山 仁美	環境カウンセラー(事業者部門)
4	岡田 操	
5	桂川 雅信	北海道教育大学札幌校 非常勤講師 環境カウンセラー(市民部門)
6	亀山 哲	国立環境研究所 流域圏環境管理研究プロジェクト 主任研究員
7	木村 勲	
8	桜井 一隆	
9	関尾 憲司	環境カウンセラー
10	高村 典子	独立法人 国立環境研究所 生物多様性研究プロジェクト
11	藤間 聡	室蘭工業大学 工学部 教授
12	仲川 泰則	北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター 森林圏ステーション 北管理部
13	中津川 誠	独立行政法人 北海道開発土木研究所 環境研究室長
14	中村 太士	北海道大学大学院 農学研究科 教授
15	西内 吾朗	
16	三上 英敏	北海道環境科学研究センター 環境科学部
17	水垣 滋	北海道大学大学院 農学研究科 森林管理保全学講座
18	宮尾 素子	
19	百瀬 邦和	タンチョウ保護調査連合
20	山内 島	環境カウンセラー(事業者部門)
21	山田 浩之	北海道大学大学院農学研究科 環境資源学専攻地域環境学講座 農地環境情報学分野
22	吉村 暢彦	
23	若菜 勇	阿寒湖畔エコミュージアムセンター マリモ研究室

団体(11名)

(敬称略、五十音順)

No	団体/機関名	代表者名
1	カムイ・エンジニアリング株式会社	代表取締役 大越 武彦
2	釧路カヌー連絡協議会	会長 岩淵 鉄男
3	釧路川水質保全協議会	会長 藪田 守 (釧路市公営企業管理者)
4	釧路自然保護協会	会長 高山末吉
5	釧路湿原塾	運営委員長 栗林 延次
6	釧路生物談話会	代表 須摩 靖彦
7	国際ソロプチミスト釧路	理事 浪岡 敬子
8	さっぽろ自然調査館	代表 渡辺 修
9	タンチョウ保護調査連合	代表 正富 宏之
10	特定非営利活動法人 トラストサルン釧路	理事長 鈴木 順雄
11	北海道標茶高等学校	校長 古屋 接雄

オブザーバー(5団体)

(敬称略)

No	団体/機関名	代表者名
1	標茶町農業協同組合	代表理事組合長 門田 功一
2	鶴居村農業協同組合	代表理事組合長 瀧澤 義一
3	幌呂農業協同組合	代表理事組合長 植田 晃雄
4	阿寒農業協同組合	代表理事組合長 小瀬 泰
5	標茶町商工会	会長 栗田 和行

関係行政機関(8機関)

(敬称略)

No	団体/機関名	代表者名
1	国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部	部長 神保 正義
2	環境省 東北北海道地区自然保護事務所	所長 星野 一昭
3	北海道 釧路支庁	支庁長 高橋 英明
4	釧路市	市長 伊東 良孝
5	釧路町	町長 菅原 澄
6	標茶町	町長 今西 猛
7	弟子屈町	町長 徳永 哲雄
8	鶴居村	村長 日野浦 正志

第2回水循環小委員会の発言概要と今後の検討方針

項目	発言概要	検討方針	備考
水循環 右岸堤などについて	<p>地下水位コンターを見ると、右岸堤のところで水位が低下している。これが右岸堤の影響である場合、右岸堤を維持したまま地下水位を保全することは可能なのか。</p> <p>右岸堤について、水循環上の課題および湿原生態系への影響を考えた場合、現在の影響を把握した上で目標を立案するといった工学的な議論が必要である。</p> <p>泥炭地にはホールディングされている水と流れている水があり、また、場所により透水性が異なる。地下水位を計測する際に透水係数を一緒に計測してその情報を加味するとともに、水が田越灌漑水田状に面から面へと流れていく構造を地下水位図に入れるとコンターラインが生きてくる。</p> <p>全体の情報を得るため、河川流量、水位、水質など、各々の目的で観測した結果をこの小委員会で有機的に結びつける必要がある。</p>	<p>科学的な手法で右岸堤の影響をできるだけ明らかにし、その上で目標を立案して委員会に提示する。</p> <p>湿原内の河川跡をまとめた資料や透水係数を計測した既往の調査結果などを踏まえ、湿原内の水の挙動などについて検討を進めていく。</p> <p>今後検討を進めていく。</p>	
河川の水質保全	<p>窒素の負荷軽減目標を2割としているが、対策により負荷軽減を図れる面積が流域全体の4分の1程度と見積もると目標がやや過大になると考えられる。</p> <p>栄養塩の流入過程は複雑だと考えられる。裸地からの流入過程を十分に把握した上で検討を進めた方が良い。</p>	<p>河川の水質変化や現状を踏まえ、流域の経済活動が拡大する前の負荷量に戻すことを目標に検討を進める。</p>	
東部3湖沼の環境保全	<p>達古武沼の水質については、今の段階で先入観を持たずに、詳細に調査した結果に基づいて結論付けた方が良い。</p> <p>水深が浅いので、底泥からの栄養塩の溶出が大きく関係していると考えられる。流入負荷量と底泥の作用を含め、全体として何が大きく関係しているのか検討する必要がある。</p> <p>過去10年程度の間達古武沼の栄養塩レベルが上昇してきている。栄養塩の供給源や地形がアオコの発生にどのように関係しているか検討する必要がある。</p>	<p>指摘があった事項に着目し、アオコの発生原因などを把握するための調査・検討を進めていく。</p>	
湿原植生の変化について	<p>ハンノキ林地が拡大した原因については、未解明であるというのが今の研究の現状である。この点については、「湿原再生小委員会」と合同で議論していくなどの考え方が必要である。</p> <p>湿原内の湧水にリンが高濃度で検出される地域があるということであるが、釧路川流域には火山灰が分布しているため、リンは土壌に吸着されて溶出しにくいはずである。高濃度で検出される原因を調査する必要がある。</p> <p>右岸堤南側のハンノキ林地が拡大した地域では、リンの濃度が高いという調査結果があったと記憶している。地下水の水質を測定し、この点についても検討を行う必要がある。</p>	<p>協議の状況に応じて合同で小委員会を開催する。</p> <p>既往の調査研究成果を踏まえ、今後検討する。</p>	

第3回 水循環小委員会

資料目次

	頁
1.これまでの調査・検討経緯と今後の計画	1
2.平成16年度の調査・検討成果の報告	4
2-1.久著呂川の水環境について	4
2-2.釧路湿原周辺の地質踏査・簡易水質分析調査結果	8
3.水循環小委員会の今後の進め方について	10
4.流域の水・物質循環系について	11